中世英語におけるフランス語からの借用語

乾　　輝　　雄

中世英語におけるフランス語からの借用語について，論議するに際し，次のように項目を分けて，論議を進める。

I. 中世におけるノルマン人のイギリス征服——その征服がイギリスに及ぼした文化的影響の評価。

II. 中世における英語とフランス語との抗争——英語の勝利・フランス語の敗北。

III. 中世後期における標準英語の成立。

IV. 中世におけるフランス語からの借用語。

1. 概説
2. 借用語の意味上の分析
3. 借用語の発音上の分析
4. 借用語の文法上の分析
5. 結論

I. 中世におけるノルマン人のイギリス征服——その征服がイギリスに及ぼした文化的影響の評価

1066年のノルマン人のイギリス征服（THE NORMAN CONQUEST）は，イギリスにはげしい突然の変化を起こさせたように，しばしば考えられ勝ちであるが，事実は，かならずしもそうではなかった。ノルマン人の

イギリス征服以前に，すでに，イギリス島には，対岸のヨーロッパ大陸にあるフランスからの強い影響があった。エドワード懺悔王（Edward the Confessor）（在位 1042—66）は，彼自身，半ノルマン人といえる人間であった。彼の宮廷は，フランスと密接な関係を持っていた。しかし，ノルマン人のイギリス征服が「英語」に深い影響を与えたことは，たしかに真実である。ノルマン人のイギリス征服後，数世紀の間，英語は，支配階級の言葉ではなくなり，標準英語といえるようなものは，存在しなくなってしまった。英語は，征服者ノルマン人の言葉の影響を受けて，しだいに変わって行った。14世紀になって，英語がふたたびイギリス全土の言葉となった時には，英語は大変化をしてしまっていた。

フランスの北西部ノルマンディー（Normandy）の支配者たちは，もとはスカンディネイヴィアの海賊（Scandinavian Vikings）たちであった。彼らは，ノルマンディー地方を占領して，そこに定住し，10世紀の初期，フランス王によってその事実が承認されたのであった。912年にロロゥ（Rollo）は，最初のノルマンディー公（Duke of Normandy）となり，フランス王を自分の最高君主（Overlord）と仰いだ。かくして，11世紀の中頃までには，ノルマン人は，すでに，かつて自分たちの母国語であったスカンディネイヴィア語を忘れてしまい，フランス語の北部方言であるノルマンディー方言（Norman French）を話すようになってしまっていた。こういうわけで，ノルマン人は，実質的にはフランス文化を身につけてしまっていたのである。一般の人々は，しばしば，ノルマン人のイギリス征服は，アングロ・サクソン人（Anglo-Saxons）より高いヨーロッパ大陸の文化が，後進的で未開的なアングロ・サクソン人の住んでいるイギリス島に到来したかのように考え勝ちであるが，そうした考え方は，かならずしも当っていないように思われる。ノルマン人のイギリス征服は，アングロ・サクソン人がイギリス島に侵入して後，すでに600年も経過してしまってから起こった出来事である。その600年の間に，イギリス人は，洗練された独得の文化

を，イギリス島において，すでに発達させていたのである。ノルマン人は，ただ，軍事上の技術においては，イギリス人よりはるかにすぐれていた。ノルマン人は，新しい重装備の騎兵隊を持っていた。この重装備の騎兵隊は，フランス国を創立したフランク人(Franks)によって考案され，ヨーロッパ大陸で発達したものであった。そうした新しい装備を有するノルマン人に対して，アングロ・サクソン人は，まだ昔ながらのゲルマン人の戦闘様式——すなわち，楯を壁のようにならべ，そのうしろに身をかくして戦う様式——を用い，しかも徒歩で戦った。新式装備のノルマン人に，旧式装備のイギリス人が負けたのは，当然のことであった。

ノルマン人は，また，築城においても優秀な技術を持っていたが，軍事上の築城のみでなく，一般の建築においても，すぐれた技術を持っていた。ノルマン人は，イギリス征服後，いくつかのりっぱな教会や大教会を建築したが，これらの建造物は，ノルマン人の建築技術の優秀性を示している。しかし，これらの事実は，ノルマン人がアングロ・サクソン人より軍事的に優秀な民族であったことの証拠にはなるが，文化的にも優秀な民族であったかどうかという点になると，簡単には決定しかねるように思われる。

アングロ・サクソン人は，イギリス島に侵入して定住して以来すでに600年も経過していたので，詩においても，散文においても，古代英語で書かれたりっぱな文学を持っていた。彼らは，7世紀以来，数百年におよぶ学問の伝統を持っていた。フランク国王・西ローマ帝国皇帝シャーレマン大王(Charlemangne the Great)が自分の国の教育制度を改革しようとした時に，彼は，一人のイギリス人をイギリスからフランスに招きよせて，改革に当らせたことがあった。このイギリス人によって改革された教育制度の伝統は，不幸にして，その後侵入して来た北ヨーロッパ人の海賊によって瓦解されてしまったけれども，10世紀後半にいたって，イギリスの西サクソン人の指導のもとで復活された。この事実は，アングロ・サクソン

人が教育面においても決して後進的でなかったことを物語っている。アングロ・サクソン人は，また，芸術作品の分野においても，後進的ではなかった。今日まで保存されているアングロ・サクソン人の芸術作品の中には，美しい彫刻をほどこした十字架，加工された美事な宝石，世界のどれとくらべても劣ることのない彩色・金文字・絵画などで飾った写本がある。アングロ・サクソン人は，また，刺繍においてもすぐれた技術を持っていた。今日フランスの北西部の町ベイユーのホテルに保存されている有名な壁掛け——いわゆる「ベイユーの壁掛け」(Bayeux tapestry)——は，イギリス島においてアングロ・サクソン人によって作られた後，ノルマン人が文化的戦利品の一つとして，フランスに持ち帰ったものであろう。アングロ・サクソン人は，すでに，イギリス島において独得の文化を発達させていたから，ノルマンディー公ウイリアム (William) とその部下とは，ヨーロッパ大陸から，わざわざ文明を持って来る必要はなかったにちがいない。

ただ，軍事面における劣性は，いかんともなしがたく，アングロ・サクソン人は，ノルマン人に征服されてしまう悲劇を招来した。ノルマン人のイギリス征服後，フランス語は，イギリス島において支配階級・上流社会の言葉となった。その理由は，征服者たちの持っている文化的優越性によるものではなく，単に，征服者たちがフランス語を話していた民族であったからであるに過ぎない。

ノルマン人のイギリス征服によって，イギリス伝来の貴族政治は，大部分破壊されてしまった。従来のイギリスの貴族たちの土地は，新しく支配者になったウィリアムの部下のノルマン人に分配された。ビショップの職と大修道院長の職のような多くの重要な宗教上の地位も，また，征服後数年の間に，ノルマン人に与えられるようになってしまった。そのため，教会と教育とは，ノルマン人によって支配されるようになった。だから，フランス語は，上流社会と宮廷との言葉として，しだいにその勢を増して行

った。この状態は，満2世紀の間続いた。こういう状態の社会では，英語だけしか話せない者には，出世の可能性はほとんどなかったであろう。そこで，多くのイギリス人は，競ってフランス語を学んだ。

グロスター（Gloucester）のロバート（Robert）の年代記は，13世紀の末頃書かれたものであるが，この年代記は，当時のイギリス社会の状態を，次のように説明している。

「かくして，イギリスは，ノルマンディーの手に落ちた。ノルマン人は，その頃，自分たちの言葉――フランス語だけしか話せなかった。ノルマン人は，自分たちの家でフランス語を話し，自分たちの子供にフランス語を教えた。イギリス島にいるノルマン人は，みんな自分たちの親から教えられた言葉――フランス語に執着した。なぜなら，当時のイギリス社会では，フランス語を知っていなければ，誰にも尊敬されなかったからである。しかし，下層階級のイギリス人は，なお，自分たちの母国語――英語を捨てようとしなかった。私は次のように思う。『全世界において，母国語に執着しない国はない。イギリスだけは別であるが・・・』。当時のイギリス社会では，英語とフランス語と両方の言葉を上手に話すことは，たしかに必要なことであった。なぜなら，両方の言葉を上手に話すことは，当時のイギリス社会では，人々に尊敬される重大要素だったからである。」

上の年代記の記事は，次の二つの事実を，われわれに教えてくれる。

(1) 当時のイギリス社会では，フランス語が権威のある言葉であったこと。

(2) 上流社会では，フランス語は権威のある言葉であったが，下層階級の人々は，なお，英語を話し続けていたこと。

しかし，英語が，もはや，上流階級の文化と行政との言葉でなくなってしまった以上，西サクソン語は，古代英語時代における英語の標準文語としての地位を失ってしまった。かくして，英語には，3世紀にわたる長い間，標準文語と言えるただ一つの形の存在しない状態が続いた。そのた

め，イギリス人は，自分たちの方言で，ものを書かねばならぬ破目におちいった。中世初期の英語のテキストは，いろいろの方言の混沌状態・無秩序状態にあったと言える。発音においても，綴りにおいても，共通の伝統がなかった。また，文法においても，語彙においても，まちまちの相違が見られる有様であった。

II. 中世における英語とフランス語との抗争——英語の勝利・フランス語の敗北

ノルマン人のイギリス征服後，古代英語時代における西サクソン語は，標準文語としての地位を失い，英語は，標準的文語のない言葉となってしまった。当時，イギリス島における権威のある言葉は，ラテン語とフランス語とであった。ラテン語は，教会の言葉・学者間の言葉・国際的連絡上の言葉であった。ラテン語は，また，ノルマン人のイギリス征服直後は，行政面においても，重要性を持っていた。しかし，その行政面のラテン語は，しだいに，フランス語に移って行くようになった。1066年のイギリス征服者ノルマン人は，ノルマンディーのフランス方言——フランスの北部方言の一つ——を話していた。このノルマンディーのフランス語は，イギリス島において独得の発達をして行った。このイギリス島において独得の発展をしたノルマンディーのフランス方言は，Anglo-Norman語と呼ばれるようになった。一方，ヨーロッパ大陸においては，13世紀に，パリーの中部フランス方言が，しだいに優力となり，フランスの他の地域の方言に強い影響を与えた。そのため，イギリス島における Anglo-Norman 方言は，孤立状態におちいり，その権威をいくらか失う破目となった。かくして，Anglo-Norman 方言は，どちらかといえば，旧式でいなかくさいものと感じられるものとなり，宮廷の言葉も，Anglo-Norman語から中部フランス語 (Central French) に移って行った。

13世紀においては，フランス語はなおイギリスの宮廷において話し続けられていた。文学も，イギリスの貴族たちのためには，まだ，フランス語で書かれていた。しかし，まもなく，英語とフランス語との比重の逆転が始まり，バランスの支点は，フランス語から離れて，英語の方へ移って行った。

フランス語は，長い間，イギリス島において権威のある言葉であったけれども，イギリス島に住んでいる大多数の人々の母国語ではなかった。ノルマン人のイギリス征服後，相当数のノルマン人がノルマンディーからイギリス島に渡って来て永久に住みつくようになったのは，当然である。しかし，それらのノルマン人の数が，アングロ・サクソン人の数を凌駕したわけではない。アングロ・サクソン人は，征服はされたけれども，人数の上では，依然として，ノルマン人より多かった。アングロ・サクソン人がヨーロッパ大陸の北西部からイギリス島に侵入した時には，侵入者のアングロ・サクソン人の数の方が，従来イギリス島にいたケルト系の民族ブリトン人（Britons）より多くなったけれども・・・。上記のようなわけで，フランス語は，結局，イギリス島では消滅して行かねばならない運命にあったのである。英語の勝利・フランス語の敗北に決定的影響を与えた事件は，13世紀の初期に，ジョン王（King John）（在位1199—1216）がノルマンディーを失ってしまった事件であった。この事件の結果として，イギリスの貴族たち——彼らの多くはイギリス島にもノルマンディーにも土地・財産を持っていた——は，自分たちがイギリスに所属するかノルマンディーに所属するか，どちらか一つを選んで決定しなければならない窮地に追いこまれた。彼らがやむを得ずたどり着いた共通の解決策は，彼らの息子の一人がイギリス島の土地・財産を継承し，他の息子がノルマンディーの土地・財産を継承することであった。上記の歴史的転換は，13世紀の前半の間にその進行を終了したらしい。かくして，イギリス島は，ノルマンディーとの結びつきを切断されてしまった。その結果，イギリス島にいるノ

ルマン人系の貴族たちは，しだいに，Anglo-Norman語を捨てて，英語を話すようになって行った。実際には，イギリス王は，フランスの南西部のビスケィ湾(Bay of Biscay)に臨む低地アクウィティン(Aquitaine)に，なお，土地を保有し続けていたけれども，それは，イギリス島に住みついているノルマン人には，もはや，何の影響も与えなかった。

それでも，イギリス宮廷では，フランス人をつれて来ることが，なお，その後を絶たなかった。従来のイギリス貴族たちは，そのようなノルマン人系の王のお気に入りの人々をねたんだ。13世紀の中頃におけるヘンリー3世(Henry Ⅲ)(在位1216—72)に対する貴族の叛乱(Barons' War)においては，外国人反対の宣伝が盛んに行われた。当時の西ヨーロッパの国々では，国家意識に対する目覚めが起り始めていたが，イギリスもまた，その例外では有り得なかったのである。上記の歴史的事実は，イギリス島における英語の権威をしだいに高めて行くことに，あずかって力があったにちがいない。

14世紀は，英語が決定的勝利を博した世紀であった。フランス語は，急速にその権威を失い始め，ノルマン人系の貴族たちさえ，もとは自分たちの母国語であったフランス語を捨ててしまうようになった。イギリス島においては，英語とフランス語との二国語を話さねばならない時代は終って，英語がイギリス島における唯一の言葉となった。フランス語を話したいと思う者は，改めてフランス語を学習しなければならない時代が来た。文学は英語で書かれ，宮廷文学でさえ英語で書かれるようになった。14世紀の後半には，英語で書かれた偉大な文学が誕生した。その文学上の主要人物は，チョーサー(Chaucer)(1400死)であった。行政面においても，英語がますます広く用いられるようになった。1362年，議会開会の際の国王の演説は，今までの先例を破って，英語で行なわれた。また，同年，フランス語に代って英語を法廷における公用語とするという法令が，議会を通過した。ただ，法廷の記録は，なお，ラテン語で書かれて保存されねば

ならなかったけれども・・・。

14世紀は，また，学校教育において，教育内容をフランス語を媒介語として教える時代から，英語を媒介語として教える時代への転換期でもあった。このことに関して，おもしろい次のような一つの証拠が残っている。

14世紀の前半に，ヒグデン (Ranulph Higden) (1364死) というチェスター (Chester) の修道士が，ラテン語でポリクロニコン (Polychronicon) という作品を書いた。これは，創世期からヒグデン自身の時代までのおもしろい歴史であった。この作品は，1385年から87年までの間に，トレヴィーサのジョン (John of Trevisa) (1326—1412) によって，南西方言の英語に翻訳された。この作品の第一巻において，ヒグデンは，ブリテン島（イギリス島）のいくつかの言葉について説明している。彼は，次のように言っている。

「イギリス人は，次の三種類の民族から構成されている。すなわち，(1)アングロ・サクソン人系の本来のイギリス人。(2)アングロ・サクソン人の中に混入してしまったスカンディネイヴィア人。(3)ノルマン人。この事実は，結局，母国語を腐敗させる原因となった。」

彼は，さらに続けて，次のように言っている。

「母国語のこの腐敗は，次の二つの事によるのである。すなわち，(1)イギリス島においては，学校の一般生徒は，他の国々の子供たちとは反対に，自分たちが幼い時から習い覚えた言葉を無理に捨てさせられ，自分たちの学ぶ学科と生徒としての仕事をフランス語に逐語訳することを強いられる。ノルマン人が最初イギリス島へやって来て以来，この事実は続いている。一方，貴族の子供たちは，ゆりかごの中でゆられ，ものを言い始め，おもちゃをいじくりまわして遊ぶようになるその時期から，フランス語を話すように教えられ育てられる。(2)一般の人々の心の中には，教養のある貴族的な人間と思ってもらいたいという虚栄心があった。そのため，一般の人々は，真剣に懸命に，フランス語が話せるように努力した。」

上記のヒグデンの言葉は，次の二つ事実を証明している。

(1) 1330年頃には，おそらく，まだ，フランス語は，イギリス人に好感を持たれていて，イギリス島では権威のある言葉であったこと。

(2) 教育においては，長い年月の間ずっと続けて，フランス語が使用されたこと。

しかし，トレヴィーサのジョンは，このヒグデンの文を英語に翻訳した時——すなわち，1385年に，ヒグデンのラテン語の原文にはない彼自身の考えを，さらに付け加えた。「フランス語崇拝の習慣は，1349年の黒死病発生の以前には，なお盛んであった。しかし，その後，情勢はやや変わって来た。ジョン・コーンウァル (John Cornwall) は，従来の学校教育におけるフランス語から英語への逐語訳の教育法に，変革を加えた。このジョン・コーンウァルの教育法は，リチャード・ペンクリッチ (Richard Pencrich) に継承され，さらに，多くの教育者たちが，リチャード・ペンクリッチからその教育法を学んだ。だから，1385年——リチャード2世 (Richard II) の治世9年目——には，イギリスの学校では，子供たちは，フランス語を捨てて英語で学習するようになった。」トレヴィーサのジョンは，さらに，次のように述べている。「上記のような教育法は，子供たちが従来より早く物事を学んで知る利益を持つが，他方において，フランス語を生半可にしか理解できない不利益を持つ。もしこういう教育を受けた子供たちが，将来外国へ行かねばならないことがあると，彼らは，かなりの不利益を経験せねばならないだろう。」トレヴィーサのジョンは，さらに付け加えて，次のように言っている。「貴族たちも，今や，大部分，自分たちの子供にフランス語を教えることを，やめてしまった。」

イギリス島におけるフランス語の最大の中心地は，宮廷であったが，ヘンリー4世 (Henry IV) (在位1399—1413) が1399年に王位に即いた時に，イギリスは，ノルマン人の征服後，初めて，王の母国語が英語である王を迎えた。ヘンリー4世は，ランカスター (Lancaster) 家のエドワード3世

(Edward Ⅲ) の第4子で，母のブランシュ (Blanche) は，ランカスター公ヘンリーの女であった。15世紀には，フランス語は，衰退の一途をたどり，英語との抗争において，決定的敗北を喫した。フランス語は，もはや，イギリス島では話されなくなったのみでなく，フランス語をまったく話せない貴族も実在するようになった。かくして，フランス語をよどみなく話すということは，単なる教養と見なされるようになってしまった。

III. 中世における新しい標準語の成立

古代英語は，北部方言 (Northumbrian)，中部方言 (Mercian)，南部方言 (Saxon)，南東部方言 (Kentish) に大別されるが，北部方言と中東部方言とには，スカンディネイヴィア語からの借用語が多数入っている。これらのスカンディネイヴィア語からの借用語のいくつかは，中世英語の期間中に，他の方言の中にも入って行った。しかし，これらの借用語の多くは，デインロー地域 (Danelaw)（イギリス島の北東部地方）だけで受け入れられたに過ぎなかった。これに対し，フランス語からの借用語は，まず最初，行政の中心地であるロンドンの周囲で，もっとも多く現われ，そのロンドンから北方と西方とへ広がって行った。

15世紀になって，行政と文化との言葉としての英語が再確立される時代が来た。基準と見なされることのできる言葉の標準型——英語の文語形の再確立の時代が来た。再確立された英語の標準文語は，古代英語時代の標準文語——西部サクソン方言 (West Saxon Dialect) の文語から，その系統を引いたものではなくて，ロンドン方言を基礎としたものであった。ロンドン方言は，根本的には，中東部方言に属する言葉であったらしい。すでに14世紀には，その隣接する境界地域の方言——南東部方言 (Kentish) や南部諸方言から強い影響を受けていた。一方において，当時，ロンドンは，政治・法律・商業の中心地であったから，イギリス全土から人々の集

まって来る土地であり，しかも，全国の学者の集まっている学問・文化の中心地ケィンブリッジ（Cambridge）やオックスフォード（Oxford）は，その近くにあった。かくして，諸方言の混合型ともいうべきロンドン方言が，標準英語として登場することとなった。印刷術の輸入は，ロンドン方言の権威を広める上において，あずかって力があった。時代が進むにつれて，中東部方言の特色が，しだいに強く現われるようになった。その理由は，当時中東部はイギリス島の豊饒な農業地域の一つであると共に，もっとも重要な商業地域でもあったからであろう。ここで注意しなければならないのは，20世紀の目で15世紀を見てはならないということである。18世紀末から19世紀にかけての第一次産業革命（Industrial Revolution）以前においては，イギリス島（スコットランドは除く）の北部では，まだ，マンチェスター（Manchester），ランカシャー（Lancashire），リヴァプール（Liverpool），リーズ（Leeds），シェフィールド（Shefield）のような工業・商業都市は隆盛期に達していない状態で，北部が今日持っているような経済的重要さを持っていなかったのである。北部は，南部にくらべれば，文化のおくれた地域であり，経済的にも社会的にも後進的であった。当時の北部では，北東部ノーファク（Norfolk）州のノリッジ（Norwich）が最大都市であった。

IV. 中世におけるフランス語からの借用語

1. 概　説

フランス語を話すことは，イギリス島では，絶滅してしまったけれども，そのフランス語は，英語に，いちじるしい痕跡を残した。フランス語の影響の主要なものは，英語の語彙に対してであった。15世紀の終りまでには，フランス語からの借用語は，従来のゲルマン語系の語と同じよう

に，イギリス人の話す言葉の中に，完全に同化されて使用されるようになっていた。中世の間に，英語の中に入って来たフランス語からの借用語の数は，莫大な数にのぼる。フランス語がイギリス島で話されなくなろうとしている末期には，フランス語の語彙の方は，かえって，急速にどっと英語の中に入って来た。フランス語がイギリスの上流階級において競争相手のない唯一の言葉であった11世紀・12世紀においては，イギリス人によって借用されたフランス語の数は，そんなに多くはなかった。しかし，13世紀・14世紀と時代が進むにつれて，フランス語からの借用語は，しだいに，その数を増し，特に，14世紀には，洪水のように入って来た。この現象は，何も驚くべきことではない。英語とフランス語と両方を話していた人々が，フランス語を捨てて英語の方へ移って行きつつあった時期には，自分が今までフランス語で表現する場合の多かった分野では，その人々の話す英文の中にフランス語の単語が頻繁に入って来るのは，当然のことだからである。決して，英語の中に，フランス語からの借用語に相当する単語が全然なかったからではない。

フランス語からの単語の流入は，いろいろの面で，スカンディネイヴィア語の単語の流入とは違っていた。スカンディネイヴィア語の単語は，すでに述べたように，ディンロー(Danelaw)地域から広がったが，フランス語の単語は，ロンドンの宮廷から広がった。その上，スカンディネイヴィア語の単語のように，下層のイギリス人に親しみのあるものではなかった。8世紀から10世紀にかけて，海上であばれまわった北ヨーロッパ人(Vikings)は，同じ条件の下でイギリス人の中に混入してしまった。これに反し，ノルマン人は，征服者であり，イギリス人は，被征服者であった。ノルマン人は，別階級を作り，自分たちの文化を，イギリス人に押しつけた。このため，フランス語からの借用語は，ノルマン人の文化的・政治的優越性を反映しているものが多い。次に，その借用語を，意味の上から分析して見よう。

2. 借用語の意味上の分析

(1) 宮廷および宮廷に出入する貴族の階級に関する語。

国王および貴族は，フランス人であったから，宮廷および貴族の階級に関する名称に，フランス語が入って来たのは，当然のことである。

英	仏
court 〔kɔ:t〕	cour 〔ku:r〕
sovereign 〔sɔ́vrin〕	souverain 〔suvrɛ̃〕
prince 〔prins〕	prince 〔prɛ̃:s〕
peer 〔piə〕	pair 〔pɛ:r〕
duke 〔dju:k〕	duc 〔dyk〕
duchess 〔dʌ́tʃis〕	duchess〔dyʃɛs〕
marquis 〔má:kwis〕	marquis 〔marki〕
count 〔kaunt〕	comte 〔kɔ̃:t〕
countess 〔káuntis〕	comtesse 〔kɔ̃tɛs〕
viscount 〔váikaunt〕	vicomte 〔vikɔ̃:t〕
baron 〔bǽrən〕	baron 〔bɑrɔ̃〕

宮廷の中では，次のような態度が要求された。

英	仏
courteous 〔kə́:tjəs〕	courtois 〔kurtwa〕
noble 〔noubl〕	noble 〔nɔbl〕
fine 〔fain〕	fin 〔fɛ̃〕
refined 〔rifáind〕	raffiné 〔rafine〕

貴族の間では，次のような事が重んじられた。

英	仏
honour 〔ɔ́nə〕	honneur 〔ɔnœ:r〕
glory 〔glɔ́:ri〕	gloire 〔glwa:r〕

しかし，英語本来のゲルマン語系の語も保存した。

king 〔kiŋ〕 (独 Körig 〔køniç〕), queen 〔kwi:n〕, lord 〔lɔ:d〕, lady (léidi〕, knight 〔nait〕 (独 Knecht 〔knɛçt〕)

〔注意〕 今日の ladies and gentlemen は，もとは，ladies and lords であった。

(2)　政治に関する語

統治者は，フランス人であったから，当然，政治に関するフランス語が，英語の中に入って来た。

英	仏
crown〔kraun〕	couronne〔kurɔn〕
state〔steit〕	état〔eta〕
realm〔relm〕	royaume〔rwajo:m〕
country〔kʌ́ntry〕	contrée〔kɔ̃tre〕
minister〔ministə〕	ministre〔ministr〕
chancellor〔tʃá:nslə〕	chancelier〔ʃɑ̃səlje〕
govern〔gʌ́vən〕	gouverner〔guvɛrne〕
government〔gʌ́vənmənt〕	gouvernement〔guvɛrnəmɑ̃〕
exchequer〔ikstʃékə〕	échiquier〔eʃikje〕
power〔pauə〕	pouvoire〔puvwa:r〕
authority〔ɔ:θɔ́riti〕	autorité〔ɔtɔrite〕
parliament〔pá:limənt〕	parlement〔parləmɑ̃〕
council〔káunsil〕	concile〔kɔ̃sil〕
counsel〔kaunsəl〕	conseil〔kɔ̃sɛ:j〕
people〔pí:pl〕	peuple〔pœpl〕
nation〔néiʃən〕	nation〔nɑsjɔ̃〕

people, realm の際には，英語本来のゲルマン語系の語も保存した。folk〔fɔ:k〕(独 Volk〔fɔlk〕), kingdom〔kíŋdəm〕(独 Königtum〔kø:niçtu:m〕)

power に相当する古代英語の onwald は，英語では使われなくなってしまったが，onwald に相当するドイツ語 Gewalt は，今日では，日本の学生の日常語となってしまっている。

(3)　法廷・法律に関する語

法廷は，長い間，フランス人によって，フランス語で，指揮された。次のような法廷・法律に関するフランス語が，英語の中に入って来た。

英	仏
court〔kɔ:t〕	cour〔ku:r〕
judge〔dʒʌdʒ〕	juge〔ʒy:ʒ〕
jury〔dʒúəri〕	jury〔ʒyri〕

suit 〔sjuːt〕	suite 〔sɥit〕
plaintiff 〔pléintif〕	plaintif 〔plɛ̃tif〕
defendant 〔diféndənt〕	défendant 〔defɑ̃dɑ̃〕
attorney 〔ətə́ːni〕	(古仏 atorne)
plea 〔pliː〕	plaid 〔plɛ〕
plead 〔pliːd〕	plaider 〔plɛde〕
justice 〔dʒʌ́stis〕	justice 〔ʒystis〕
cause 〔kɔːz〕 正当な理由	cause 〔koːz〕
accuse 〔əkjúːz〕	accuser 〔akyze〕
summon 〔sʌ́mən〕	sommer 〔sɔme〕
crime 〔kraim〕	crime 〔krim〕
punish 〔pʌ́niʃ〕	punir 〔pyniːr〕
sentence 〔séntəns〕 宣告	sentence 〔sɑ̃tɑ̃ːs〕
prison 〔prízn〕	prison 〔prizɔ̃〕

その他，最初は、法律用語として借用されたが，その後，広い意味に用いられるようになったものも多い。

英	仏
case 〔keis〕	cas 〔ka〕
marry 〔mǽri〕	marier 〔marje〕
marriage 〔mǽridʒ〕	mariage 〔marjaːʒ〕
false 〔fɔːls〕	faux 〔fo〕
fault 〔fɔːlt〕	faute 〔foːt〕
defend 〔diférnd〕	défendre 〔defɑ̃ːdr〕
prove 〔pruːv〕	prouver 〔pruve〕

(4) 宗教に関する語。

たくさんの宗教上の地位が，フランス人に与えられた。次のような宗教に関するフランス語が，英語の中に入って来た。

英	仏
religion 〔rilídʒən〕	religion 〔rəliʒjɔ̃〕
saviour 〔séivjə〕	saveur 〔savœːr〕
saint 〔seint〕	saint 〔sɛ̃〕
angel 〔éindʒəl〕	ange 〔ɑ̃ːʒ〕
abbey 〔ǽbi〕	abbaye 〔abeji〕

friar 〔fraiə〕	frère 〔frɛːr〕
clergy 〔klə́ːdʒi〕	clergé 〔klɛrʒe〕
parish 〔pǽriʃ〕	paroisse 〔parwɑs〕
baptism 〔bǽptizm〕	baptême 〔baptɛːm〕
pray 〔prei〕	prier 〔prie〕
prayer 〔prɛə〕 祈禱	prière 〔priɛːr〕
preach 〔priːtʃ〕	prêcher 〔prɛʃe〕
sermon 〔sə́ːmən〕	sermon 〔sɛrmɔ̃〕
altar 〔ɔ́ːltə〕	(14世紀 altérer)

次の語も，初めは，宗教用語として入って来たものである。

英	仏
service 〔sə́ːvis〕	service 〔sɛrvis〕
virgin 〔və́ːdʒin〕	vierge 〔vjɛrʒ〕
sacrifice 〔sǽkrifais〕	sacrifice 〔sakrifis〕
conscience 〔kɔ́nʃəns〕	conscience 〔kɔ̃sjɑ̃ːs〕
mercy 〔mə́ːsi〕	merci 〔mɛrsi〕
pity 〔píti〕	pitié 〔pitje〕
grace 〔greis〕	grâce 〔grɑːs〕
charity 〔tʃǽriti〕	charité 〔ʃarite〕
save 〔seiv〕	sauver 〔sove〕
vice 〔vais〕	vice 〔vis〕
desire 〔dizáiə〕	désir 〔deziːr〕
tempt 〔tempt〕	tenter 〔tɑ̃te〕
blame 〔bleim〕	blâmer 〔blɑme〕
cruel 〔krúəl〕	cruel 〔klyel〕
jealous 〔dʒéləs〕	jaloux 〔ʒalu〕
lesson 〔lesn〕	leçon 〔ləsɔ̃〕

(5) 軍事に関する語。

軍事は，日進月歩の分野である。だから，今日はもう用いられなくなってしまったものが多い。

英	仏
army 〔ɑ́ːmi〕	armée 〔arme〕
navy 〔néivi〕	(古仏 navie 船)
war 〔wɔː〕	guerre 〔gɛːr〕

peace 〔piːs〕	paix 〔pɛ〕
battle 〔bætl〕	bataille 〔batɑːj〕
arms 〔ɑːmz〕	armes 〔ɑrm〕
armour 〔ɑ́ːmə〕	armure 〔armyːr〕
tower 〔tauə〕	tour 〔tuːr〕
assault 〔əsɔ́ːlt〕	assaut 〔aso〕
siege 〔siːdʒ〕	siège 〔sjɛːʒ〕
enemy 〔énimi〕	ennemi 〔ɛnmi〕
march 〔mɑːtʃ〕	marche 〔marʃ〕
force 〔fɔːs〕 兵力	force 〔fɔrs〕

次の語も，もとは軍隊用語として入って来たものであった。

英	仏
danger 〔déindʒə〕	danger 〔dɑ̃ʒe〕
escape 〔iskéip〕	échapper 〔eʃape〕
aid 〔eid〕	aide 〔ɛːd〕

〔注意〕 フランス語の guerre は，もともと，ゲルマン語から借用されたものである。〔w〕は唇喉音 (labioguttural〕とも呼ばれるように，喉音 (guttural) 〔g〕と交換されやすい音である。

（6） 芸術・衣服・建築・技術などに関する語。

これらに関する借用語の中には，フランスの優越性を反映しているものが多い。

英	仏
art 〔ɑːt〕	art 〔aːr〕
beauty 〔bjúːti〕	beauté 〔bote〕
colour 〔kʌ́lə〕	couleur 〔kulœːr〕
paint 〔peint〕	peinder 〔pɛ̃ːdr〕
design 〔dizáin〕	dessein 〔desɛ̃〕
figure 〔fígə〕	figure 〔figyːr〕
image 〔ímidʒ〕	image 〔imaːʒ〕
music 〔mjúːzik〕	musique 〔myzik〕
chant 〔tʃaːnt〕	chant 〔ʃɑ̃〕
poem 〔póuim〕	poème 〔pɔɛːm〕

romance 〔rəmǽns〕	roman 〔rɔmɑ̃〕
apparel 〔əpǽrəl〕	appareiller 〔aparɛje〕
costume 〔kɔ́stju:m〕	costume 〔kɔstym〕
dress 〔dres〕	dresser 〔drɛse〕
fashion 〔fǽʃən〕	façon 〔fasɔ̃〕
arch 〔ɑ:tʃ〕	arche 〔arʃ〕
vault 〔vɔ:lt〕	voûte 〔vut〕
pillar 〔pílə〕	pilier 〔pilje〕
column 〔kɔ́ləm〕	colonne 〔kɔlɔ́n〕
porch 〔pɔ:tʃ〕	porche 〔pɔrʃ〕
tailor 〔téilə〕	tailleur 〔tɑjœ:r〕
mason 〔meisn〕	maçon 〔mɑsɔ̃〕
carpentier 〔kɑ́:pintə〕	charpentier 〔ʃarpɑ̃tje〕
painter 〔péintə〕	peintre 〔pɛ̃:tr〕
joiner 〔dʒɔ́inə〕	(古仏 jojgner)
butcher 〔bútʃə〕	boucher 〔buʃe〕
furniture 〔fə́:nitʃə〕	fourniture 〔furnity:r〕
table 〔teibl〕	table 〔tabl〕
chair 〔tʃɛə〕	chaise 〔ʃɛ:z〕

（7） 主従関係をあらわす語。

フランス人は支配階級・金持ち階級であり，イギリス人は被支配階級・貧困階級であったから，主従関係・金銭関係をあらわす語には，フランス語からの借用語が多い。

英	仏
sir 〔sə:〕	sire 〔si:r〕
master 〔mɑ́:stə〕	maître 〔mɛ:tr〕
madam 〔mǽdəm〕	madame 〔madam〕
mistress 〔místris〕	maîtress 〔mɛtrɛs〕
servant 〔sə́:vənt〕	servant 〔sɛrvɑ̃〕
obey 〔obéi〕	obéir 〔ɔbei:r〕
rich 〔ritʃ〕	riche 〔riʃ〕
poor 〔puə〕	pauvre 〔po:vr〕

riches 〔rítʃiz〕	richesse 〔riʃes〕
poverty 〔pɔ́vəti〕	pauvreté 〔povrəte〕
money 〔mʌ́ni〕	monnaie 〔mɔnɛ〕
cash 〔kæʃ〕（もと「銭箱」）	casse 〔kɑ:s〕
rent 〔rent〕	rente 〔rɑ̃:t〕

（8） 食事に関する語。

食卓にのぼる料理には，フランス語からの借用語が多い。

英	仏
beef 〔bi:f〕	bœuf 〔bœf〕
veal 〔vi:l〕	veau 〔vo〕
mutton 〔mʌtn〕	mouton 〔mutɔ̃〕
pork 〔pɔ:k〕	porc 〔pɔ:r〕

スコットランドの小説家・詩人の Sir Walter Scott (1771–1832) が，その著 Ivanhoe において指摘したように，料理されて食卓にのぼった beef, veal, mutton, pork も，イギリス人がまだ家畜として世話していた間は，なお，従来のゲルマン語系の英語で呼ばれた。

料理された後の名	家畜の時の名	ドイツ語
beef	ox, cow	Ochs, Kuh
veal	calf	Kalb
mutton	sheep	Schaf
pork	swine	Schwein

その他，食事に関する借用語には，次のようなものがある。

英	仏
sauce 〔sɔ:s〕	sauce 〔so:s〕
soup 〔su:p〕	soupe 〔sup〕
sausage 〔sɔ́sidʒ〕	saucisse 〔sosis〕
fry 〔frai〕	frire 〔fri:r〕
roast 〔roust〕	rôtir 〔rɔti:r〕

dinner 〔dínə〕（仏 dîner 〔dine〕），supper 〔sʌ́pə〕（仏 souper 〔supe〕）のように，比較的ご馳走の出る食事は，フランス語からの借用語を用いるようになったが，簡単にすます breakfast 〔brékfəst〕 (break+fast) は，ゲル

マン語系の語を保存した。

（9） 享楽生活に関する語。

上流階級の楽しんだ狩猟・カルタなどの享楽生活に関する語は，もちろん，フランス語から借用された。

英	仏
chase〔tʃeiz〕	chasser〔ʃase〕
falcon〔fɔ:kn〕	faucon〔fokɔ̃〕
track〔træk〕	trac〔trak〕
scent〔sent〕	sentir〔sɑ̃ti:r〕
card〔kɑ:d〕	carte〔kart〕
die〔dai〕	dé〔de〕
partner〔pɑ́:tnə〕	partenaire〔partənɛ:r〕
suit〔sju:t〕	suite〔sɥit〕
ace〔eis〕	as〔ɑ:s〕
deuce〔dju:s〕	deux〔dø〕

couple〔kʌpl〕（仏 couple〔kupl〕）は，もと，「二匹の猟犬をつなぐ革ひも」の意であった。また，trump〔trʌmp〕は，もと，「切り札，勝利札」の意で，triumph〔tráiʌmf〕（勝利）から出た。その triumph は，フランス語の triomphe〔triɔ̃:f〕の借用語である。

最後に注意すべきことは，フランス語からの借用語も，従来のゲルマン語系の英語も，今日併存している事実である。

従来の英語	フランス語からの借用語
house（独 Haus）	manor＝house and land of a lord
	palace＝large and stately house
man＝man-servant（独 Mann）	butler＝head man-servant
maid（独 Magd）	female servant
holy（独 heilig）	saint
hearty（独 herzig）	cordial
doom	judgment
stench（独 Gestank）	perfume
wish（独 wünschen）	desire

child (独 Kind)	infant
thief (独 Dieb)	robber
bloom (独 Blume)	flower

3. 借用語の発音上の分析

われわれが近代フランス語を知っている時，われわれは，英語の単語とそれに対応する近代フランス語の単語との間の発音の差異に，困惑を感じさせられる。これらの差異は，中世から今日までに，発音において起こった変化の結果なのである。

今日の英語の chief〔tʃiːf〕は，古代フランス語の chef（今日のフランス語 chef〔ʃef〕）を借用した中世英語から出た語である。しかし，今日では，発音はまったく違っている。語頭の ch の発音は，今日の英語では，古代フランス語の発音に近い〔tʃ〕を保存しているのに対し，近代フランス語では，〔ʃ〕に変わってしまっている。一方，母音においては，今日のフランス語は，もとの短い〔e〕を保存しているのに対し，英語では，長い〔iː〕に変わってしまっている。今日の英語の chef〔ʃef〕（料理人がしら）は，近代になってからフランス語から借用されたものであるから，今日のフランス語と同じ発音を持っている。

中世におけるフランス語からの借用語と近代フランス語との間の発音の相違には，他の理由によるものもある。それは，古代フランス語自身の中に存在した方言的相違である。近代フランス語の標準語は，古代フランス語の中部方言から出たものである。しかし，ノルマン人は，フランス語の北部方言を話していた。その北部方言は，中部方言とは，多くの点で違っていた。たとえば，古代フランス語の重母音 ei は，中部方言では oi となったが，イギリス島で話されていたノルマン人のフランス語は，古代フランス語の ei をそのまま保存した。このため，今日の英語は，今日のフ

ランス語と次のような相違を持つようになっている。

近代英語	アングロ・ノルマン語	近代フランス語
prey	preie	proie
veil	veile	voile
strait	estreit	étroit

フランス語の中部方言においては，ka, ga は，cha, ja となった。しかしこの変化は，アングロ・ノルマン語には起こらなかった。英語 garden, フランス語 jarden; 英語 catch, フランス語 chasser は，上記の理由による。

英語 catch, フランス語 chasser は，また，もう一つの発音上の差異の理由を，われわれに教えてくれる。ノルマンディーにおいては，古代フランス語の s は，ch になった。だから，中部方言の chacier, lancier（近代フランス語 chasser, lancer）を，ノルマン人は，cachier, lanchier といった。このノルマン人の語から，今日の英語 catch, launch は出たのである。

すでに，「借用語の意味上の分析」の (6) の「軍事に関する語」の中の〔注意〕において述べたように，古代フランス語がゲルマン語から借用した語の中の w のその後の変化である。アングロ・ノルマン語では，この w は，保存されたが，中部方言では，g に変わった。

英	古仏	仏
war	werre	guerre
wage(s)	wage	gage
warrant	warant	garant
warden	wardein	gardien
wardrobe	warderobe	garde-robe
wafer	waufre	gaufre

一般的に見て，ノルマン語からの借用語は，初期に限られていた。大量の借用語のなされた13世紀と14世紀とにおいては，フランス語の中部方言が借用された。初期に借用されたノルマン語は，まったく，英語に同化し，

その後に借用された中部方言にくらべれば， people, garden, market, hour, wages のような日常語が多い。これは，たぶん，ノルマン人が Dover 海峡を越えてイギリス島に渡って来た時に，ノルマン人の民衆によって，英語に取り入れられたからであろう。

ある場合には，一つの語が，最初ノルマン語の形で借用され，その後ふたたび中部方言の形で借用されたようなこともあった。catch（捕える），cattle（家畜），warden（門番，見張人），wage(s)（賃金）は，ノルマン語から借用されたものであるが，それに相当する chase（追う，狩る），chattel(s)（家財），guardian（管理人，保護者），gage（抵当物）は，中部方言から借用されたものである。

語が最初借用された時には，それらの借用語は，たぶん，フランス語の通りに発音されたのであろう。特に，英語とフランス語と両方を話す人々の間では，そうであったであろう。しかし，まもなく，借用されたフランス語の発音は，英語の発音体系に順応されるようになった。また，フランス語を話す人も，フランス語の発音にもっとも近い英語の発音で話すようになった。言いかえれば，英語式発音のフランス語を話すようになった。

フランス語を英語式に発音する例として，借用語としては新しいが，フランス語 garage〔gara:ʒ〕を取って見よう。この語を発音するに際しては，フランス語を知っている人でさえ，英語的に発音する。イギリス人は，フランス語の懸壅垂（uvular）の r をフランス語通りに発音しないし，また，フランス語の a をフランス語通りに発音しない。さらに，英語式のアクセント型——第一音節にアクセントを置いて発音する。すなわち，〔gǽrɑ:ʒ; gǽridʒ〕

garage と同じようなことが，中世英語におけるフランス語からの借用語にも起こった。たとえば，nature のような語も，借用当時は，フランス語のように第二音節にアクセントを置いて話していたが，時がたつと共に，英語式にアクセントは第一音節に移行してしまった。この方が，英語

を話す場合の習慣に一致しているからである。

4. 借用語の文法的文析

英語においては，フランス語から単語を借用する際，どの形を採用したか？　名詞・形容詞と動詞とに分けて，説明するのが至当であろう。

(a)　名詞・形容詞

古代フランス語の名詞および形容詞は，主格 (nominative case) と目的格 (objective case) とを，語形の上で，区別することができた。

	単数	複数
主　格	murs 壁	mur
目的格	mur	murs

この四つの形のうち，どの形が，英語に入ったか。一般的には，単数の目的格が入った。主格と目的格とが競争する場合，一般的に目的格の方が優勢であるのは，Who is it? It's **me.** のような言い方に見られる。

単数の主格が入ったものは，まれである。次の例は，単数の主格の入ったものである。

英	仏
apprenti**ce** 〔əpréntis〕	apprenti 〔aprɑ̃ti〕
fier**ce** 〔fiəs〕	fier 〔fjɛːr〕

〔注意〕 次のフランス語の語尾 -s は，昔の単数主格の名残りである。
Louis 〔lwi〕, Charles 〔ʃarl〕, fils 〔fis〕, rubis 〔rybi〕, rais 〔rɛ〕

次の借用語では，フランス語の複数目的語が入り，英語では，単数と用いられている。

英	仏
invoi**ce** 〔ínvɔis〕	envoi 〔ɑ̃vwa〕
tra**ce** 〔treis〕	trait 〔trɛ〕

(b) 動　詞

動詞は，一般に，現在分詞語幹が英語に入った。フランス語 survivre を例にとって見よう。

現在分詞	surviv-ant			
	je	survi-s	nous	surviv-ons
	tu	survi-s	vous	surviv-ez
	il	survi-t	ils	surviv-ent

上の形のうち，現在分詞語幹 surviv- が，英語に入って来て， survive となっている。

次に，その例をあげて見よう。

英語	古仏	現在分詞語幹	仏	現在分詞語幹
feign	feindre	feign-	feindre	
join	joindre	joign-	joindre	
attain	ateindre	ateign-	atteindre	
advertise			avertire	avertiss-
rejoice	resjoïre	resjoïs-	réjouir	
suffice			suffire	suffis-
abolish			abolire	aboliss-
accomplish	acomplir	acomplis-	accomplir	
banish	banir	banis-	bannir	
cherish	cherir	cheris-	chérir	
establish	establir	establiss-	établir	
finish	finir	finiss-	finir	
flourish	florir	floriss-	fleurir	
nourish	nourir	nouris-	nourrir	
perish	perir	periss-	périr	
polish			polir	poliss-
punish			punir	puniss-

不定詞は，通常，名詞として英語に入った。

英	古仏	仏
dinner	disner	dîner

(〔比較〕英 dine<古仏現在分詞語幹 disn-)

rejoinder		rejoindre

(〔比較 英 rejoin<仏現在分詞語幹 rejoign-)

attainder	ateindre	atteindre

(〔比較〕英 attain<古仏現在分詞語幹 ateign-)

しかし，不定詞が動詞として入ったものもある。

英	古仏	仏
render		rendre
surrender	surrendre	

5. 結　論

中世初期のフランス語からの借用語は，英語に十分同化されてしまったから，今日では，外国からの借用語のようには感じられなくなってしまっている。この事実は，英語が，比較的近代になってから，フランス語やラテン語を，大した抵抗もなく受け入れる傾向を，作り上げた。洪水のようなフランス語の英語への流入は，英語を，好意をもって外国語を受け入れる柔軟な言葉にした。それと同時に，新語を造る際には，英語自身の持つ資料をもとにしないで，外国語をそのまま借用する言葉にもした。古代英語が，英語自身の持つ資料を用いて，tungocræft (=star skill) または þriness (=threeness) を新造する所において，中世英語と近代英語とは astronomy <仏<ラテン<ギリシァ) と trinity (<仏<ラテン) とを採用する傾向にあった。

英語は，さらに，借用した外国語に，英語固有の prefix や suffix を付加して，多数の新語を造った。ノルマン人のイギリス島征服後は，フランス語と英語との混血種または雑種ともいえる語が，急速にあらわれるようになった。特に，フランス語の語幹に，英語の prefix や suffix を付加したものが，非常に多い。

ungracious, preach**ing**, gentle**ness**, faith**less**, beauti**ful**